園長コラム～みんなが笑顔になれる保育園への道～　2025 年 12月号

～育てたように子は育つ～

●11月の秋空に赤や黄色に色付いたモミジやサクラの葉が鮮やかな彩りを添える中、今年も園外保育に行ってまいりました。行先は昨年と同じく　夢見ケ崎動物公園（川崎市）です。



11 月 6 日･7 日の 2 日に分け、さくらしんまち保育園･ぴっころ保育園と合同で行ってきました。

●動物園に着くと 5～6 人の異年齢グループに分かれ、園内を自由に歩き回ります。どの動物をどんな順番で回るかは、あらかじめ保育園でグループごとに動物園の地図を見て相談済みです。その順路は地図に書き込まれ、当日はその地図を各グループのリーダーが首からぶら下げて回ります。





●園内の各動物ゾーンには、インカムを装着した職員が散ら

ばり子どもたちを待ち構えます。そこで、不審者や作業用車両等の往来、またグループからはぐれた子がいないかなど、安全面に留意した情報交換をしながら、目の前を通過するグループの子どもたちに道案内をしたり、動物の様子や感想を聞いたりとサポート役に徹します。

●毎年ここでは異年齢小集団ならではの数々の成長ドラマが生まれます。今年も忘れられないワンシーンに立ち会いましたので、この場を借りて紹介させていただきます。

【驚くべきぐんぐんさんのコミュニケーション能力】

●その日の動物園散策も終盤に差し掛かった時のことです。各動物ゾーンに待機している職員からはインカムで、予定していた全ての動物を見終えたグループが続々と、お弁当タイムを過ごす芝生広場へと移動を開始する旨の連絡が入ってきていました。

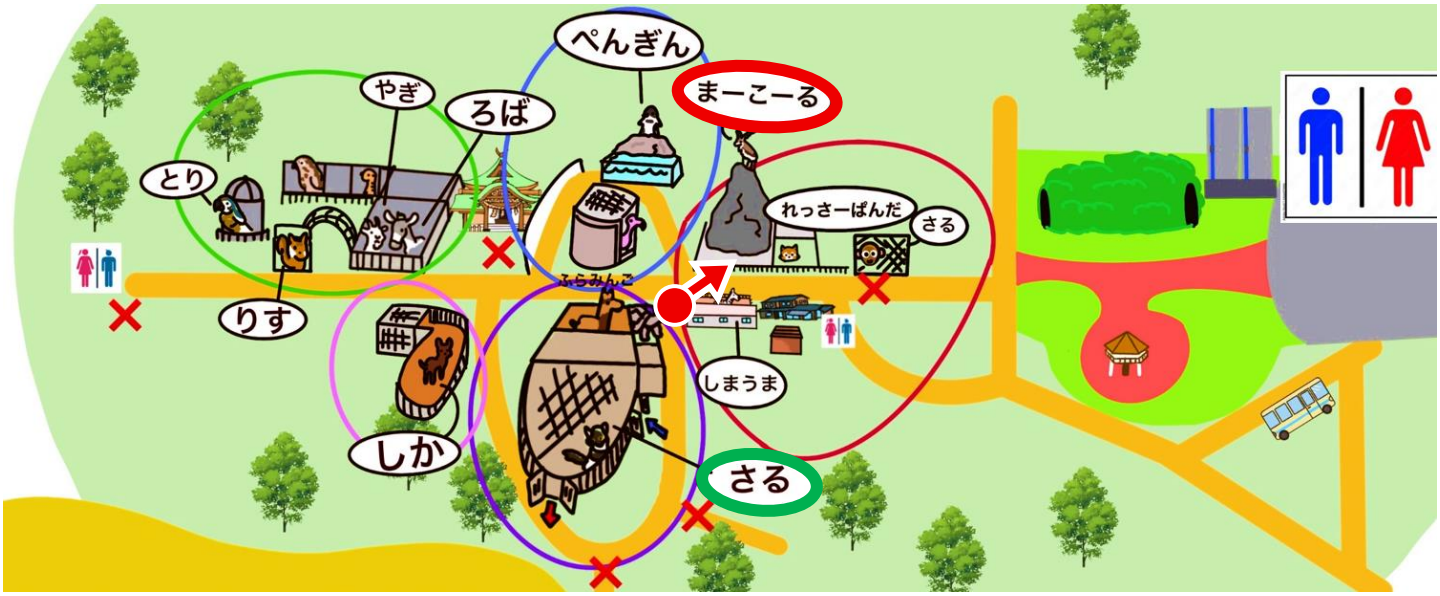
●そんな中、気になる一報が入ってきました。
「こちらサルゾーンですが、まだ赤グループが来ていません。赤グループが現在どこにいるかわかりますか？」

●特定のゾーンには張り付かず巡回する役目の私が園内を探すと、メインストリートで立ち往生している赤グループの子どもたちをすぐに見つけました。近づいてみると、「これ以上歩きたくない」と言わんばかりに曇り顔で立ち尽くすくらんらん（３歳児クラス）に対し、ぐんぐん（５歳児）・もりもり（４歳児）のメンバーが手を焼いている様子が伝わってきました。





●初めは子どもたちから少し離れた場所で、写真を撮りながらその様子を興味深く観察していた私も、そろそろ残り時間が気になり出しました。子どもたちのお腹も空いてきたはずです。(さて、どうやってこの場を収めようか…。)そう思いを巡らせはじめた、その時です。赤グループの子どもたち全員が、サルゾーンとは反対方向のマーコール(ヤギの仲間)の方に向けて歩き始めたのです。



●不思議に思った私は、赤グループのぐんぐんの男の子に近寄り尋ねました。「あれ？サルはもう見ないことにしたの？」すると男の子はこう答えました。「いや。○○ちゃんたちに『何が見たいの？』って聞いたら、『マーコールもう1回見たい』って言うから、『それなら、マーコールもう1回見たらサルに行ってくれる？』って聞いたら、『いいよ』って言ってくれたんだ。」

●この答えを聞き私はあっけにとられました。各グループの順路は大体ぐんぐんが主体となって決めています。一番楽しみにしていた動物を順路の最後に持ってきているグループもあります。それが今、時間切れで見られなくなるかもしれないのです。内心、グループ行動ということを忘れ、らんらんを置いて今すぐサルゾーンに向かって走り出したい。ぐんぐ

んの子どもたちがそう考えたとしても致し方のない状況です。

●ところがこの子たちは違いました。なんと、まずらんらんの子が何をしたいのかを聞く（**思いを受け止める**）ことから始めたのです。それも下の写真のように目線を合わせてです。その上で、その子の**思いを叶えることを交換条件に**、自分たちが見たいサルゾーンにも一緒に行くという**「約束」を取り付けた**ではありませんか。見事としか言いようがありません。



●実際に、一度見て気に入ったマーコールを再び見れて満足したらんらんさんは、その後すんなりとサルゾーンへの移動に協力し、（らんらんさんも素晴らしいです。）無事みんなでサルゾーンを楽しむことができました。一見遠回りのようでも誰にも嫌な思いをさせない、実にスマートな提案です。





●それにしてもこの見事なやりとり。一体いつの間にどこでこんな交渉術を身に付けたのでしょう。本人の才能？ご家庭での丁寧な関わり？しかし私の中にはもう一つだけ、思い当たる節がありました。（ああ、そうか。うちの先生たちだ。）

●思えばミル保育園の保育の特徴は選択制です。日頃から保育環境に複数の選択肢を設定し、子どもに選んでもらうことで、子どもの主体性を育むことをねらいにした保育を実践しています。子どもは、与えられた選択肢の中からすんなり自分の好きな環境を選ぶことができる時もあれば、選べない時もあります。選べない時の理由は様々ですが、多くの場合が、その環境を選ぶメリットがイメージしづらいか、他にやりたいことがはっきりしているケースです。そんな場面に出会った時、ミルの保育者は必ずこう優しく問いかけるようにしています。「〇〇君（ちゃん）は、何がしたい？」

●ある交換条件を誰かに提示できるということは、過去に自分自身もその条件を提示され、心が動いたという実体験があるからではないでしょうか。思い返せば、このぐんぐんの子どもたちも、日頃から保育や給食のあらゆる場面で「○○君は何がしたい？」と言った、自分の要望が受け止められる経験と、「じゃあ、たくさん○○したら、その後で○○しようか」という保育士からの提案に対し納得できたという実体験を積み重ねてきたはずです。

●このように、私たちミルの保育者が毎日当たり前のように子どもたちに関わってきたやり取りが、子どもの生きる力のテンプレートとして具体的に根付いたのでは？と思えるような事例を垣間見れたことは、私たち職員にとって大きな励みとなりました。非常に嬉しいワンシーンです。
●さて、今回のエピソードから私の頭の中に浮かんだ来た言葉が二つあります。一つは詩人の相田みつを氏の「育てたように子は育つ」という言葉です。大人の愛情ある声掛けや言動が、知らず知らずのうちに子どもの人格形成に影響を与えているということを示唆する内容です。

●もう一つは「人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ」の著者であるロバート・フルガム氏（牧師・作家）の次の言葉です。
Don’t worry that children never listen to you; worry that they are always watching you.

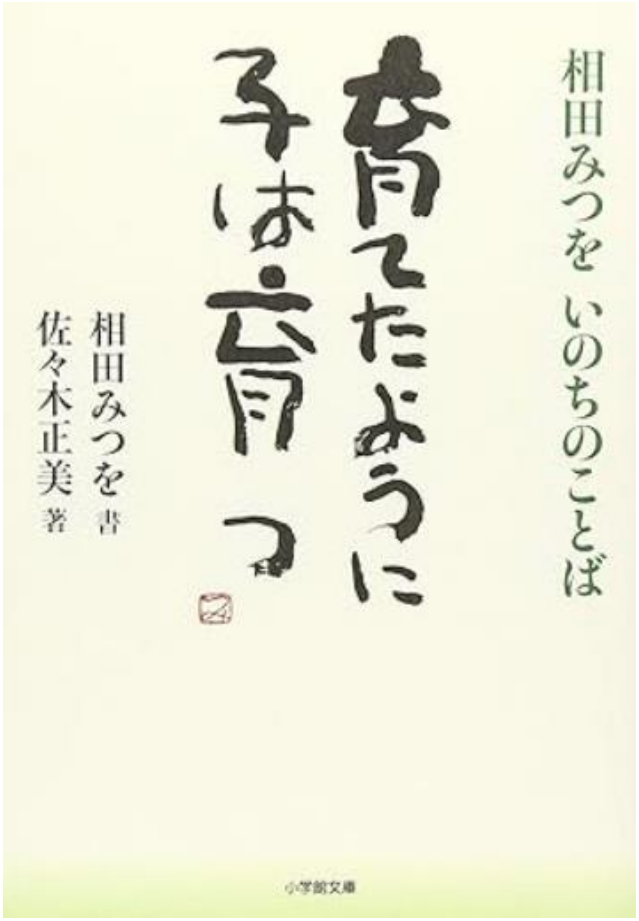
（子どもがあなた（大人）の言うことを聞かないことはそれほど気にしなくていい。それよりも気にすべきは、子どもはあなたの行動を常に見ているということだ。）

大人の行動は、良いことも悪いこともその両面において子どもに少なからず影響を与える。そのことに警鐘を鳴らす内容です。この言葉は、私たち保育者にとって、常に肝に銘じてお

くべき箴言であると考えています。

園長　橋本　英明





（追伸）

●今回ご紹介したエピソードでは、ぐんぐんさんから自分の思いを受け止めてもらったらんらんさんにとっても、非常に貴重な体験となったのではないかと考えています。なぜなら子どもは対保育者との関わり以上に異年齢の子ども同士の関わりから学ぶことの方が非常に多いからです。今から2年後に、ぐんぐんになったこの子たちがらんらんさんに優しく寄り添う姿～年上の子から育てられたように育った姿～を想像するだけで、顔がほころんでしまいます。

　こうしたやり取りが私たち保育者が見ている・見ていないを問わず日々繰り広げられているということが、異年齢子ども集団で生活するミル保育園の意味であり、価値なのだと思います。

●「育てたように子は育つ」の言葉は、裏返せば「子育ては親育て」とも言えそうです。日頃子どもたちの育ちに保育者として真剣に関わることで、反対に私たちが成長の機会を沢山いただいていることに対し感謝の思いでいっぱいです。